
魔法少女リリカルなのは Strikers 天駆ける蒼穹

飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers 天駆ける蒼穹

【Nコード】

N4406Y

【作者名】

飛鳥

【あらすじ】

新暦0075年、陸士072部隊に所属する自称の^{おっさん}アディールはサイガー等陸士は部隊長に呼び出される。

そこで言い渡されたのは、異動命令。

行先は……『時空管理局本局遺失物管理部機動六課』

第零話 プロローグ

side:?????

熱帯性の植物が空を覆い隠すように枝を伸ばし、一面を緑にした世界……

そこを俺たちは周囲を警戒しながら、
四方八方に伸びている木々を踏み倒しながら先へと進んでいた。

「なあ……」

「ん？」

その集団に属している俺はは、同僚の遠慮したような声に答えた。

「なんだ？」

「俺たち何しにここに来たんだ？」

俺は同僚の言葉に呆れかえっていた。

だが、これもいつもの事だと俺は俺に言い聞かせながら同僚の質問に答える。

「この世界で幾つものロストログアが発見されたから、それを回収しに来たんだ。ブリーフィングの時に部隊長が言っていただろ……。また聞いてなかったのか？」

俺は目を細めて同僚を見たが、同僚は「タハハ……」と笑いながら頭を掻いていた。

そう、これもいつも通り……。こいつがブリーフィングで居眠りをして、作戦の内容を聞き逃して、作戦開始直前か、酷い時には作戦中にそれを聞いてくることも……。それに俺は呆れながらもいつも教えてやっている事も……。いつも通りだった。

そして、この後もいつも通りに作戦を完了させて、同僚と一緒に部屋へ戻り作戦の無事成功を祝って酒を飲み、そこに部隊の先輩たちが混ざって宴会騒ぎになるのもいつも通りだと思っていた。

そう……この時までには……

side:???

out

「そこ、私語は慎め」

「……………」

小隊長の棘のある言葉を聞いて「青年」と同僚は口を閉じた。

「ふう……………」

その様子を見て小隊長は一人溜息をついた。原因はあの二人……「青年」とその同僚だ。訓練校の時から周りを置いてけぼりにしてブツギリの成績を残していた二人だったが、それでも問題があった。素行が悪すぎたのだ。

「青年」の方は問題はなかった。

問題があつたのはその同僚だつた。

訓練や授業をサボるのは日常茶飯事、酷い時には訓練校の生徒全員を巻き込んでボイコットを起こしたこともある。(原因は当時の教導官の理不尽な訓練量の多さだつたため、処分は軽いものだった。)

「小隊長、宜しいですか……?」

「なんだ……?」

その時、彼の副官が小声で彼に話し掛けてきた。

「正直に言つて、自分は今回の回収任務に疑問があります。ここのような未開拓の世界、しかも視界をこう塞がれている状況です。部隊を分けてまで搜索するよりも他の次元航行艦の到着を待つてからでも遅くはなかつたのではないですか?」

「その事か……。それに関しては俺も同じ意見だ。だが、発見した物がロストロギアだからな。その待つている間に暴走でも起こしたら事だから小隊長は強硬手段に出たのだろう」

小隊長は副官の質問にしかめっ面をしながら答えた。

実際、彼も今回の件については不服なところが多かつた。

発見されて間もない未開拓の世界でのロストロギア発見の報。

複数のロストロギアを発見したため、ただでさえ少ない人員をさらに裂かなくてはならなくなつた。

本来なら管理局本局に報告をし、人員を送つてもらうのが定石なのだが、彼らの小隊長はその案を却下し、ロストロギアが暴走する前にすべてを回収すると言つ指示を彼らに下した。

「最近の小隊長は何かおかしいですよ……。大体、こんな通信もま

ともに通りにくい場所に小人数で行動させるなどと……」

「そこまでにしておけ、それ以上は上官侮辱罪に当たるぞ……。確かに通信は届きにくいかも知れんが、そのためにこれを渡してきたのだろっ」

副官の言葉を制して小隊長は自分の左胸に取り付けている装置を指さす。

「装着者の心音と魔力波を発信し、現在位置を割り出すためのデバイス……でしたっけ。これって役に立つのでしょうか？」

「役立つてもらわなければ困るさ」

副官の言葉に小隊長は軽く笑みを浮かべて笑った。

side:???

俺たちは小隊長に注意された後、周囲を警戒しながら更に奥地に進んでいった。

ふと、小隊長と副隊長が話しているのが気になり、そちらに顔を向けると、小隊長が笑みを浮かべていた……。つて、ええ！？あの堅物で有名な小隊長が笑みを！？

これは一大事だと俺は隣を歩く同僚の肩を叩こうとしたが、それは叶わなかった。

ドオオオオン！！

爆発！？どこで！？

「状況報告！！」

小隊長が大声で叫ぶ。

その叫びに同僚がすぐに応えた。

「ここではありません！別の小隊の方です！！」

『 こちら、D小隊 、応答して い！こちら

！！』

その時、俺たちの持つ『ストレージデバイス』に通信が入った。

「こちらA小隊！！何があった！？」

『 突然 黒い何かに ハッ！？うわああー！！？

』

小隊長がいち早く反応し、通信に答えるが通信してきたD小隊の隊員は悲鳴をあげた直後に何か不快な……、肉を切るような音とともに通信が切れた。

「ッ！全員第一級警戒態勢！！他の隊との連絡は！？」

「B小隊、C小隊共に通信が取れません……！！」

小隊長の問いかけに副隊長は苦虫を噛み潰したかのような表情で答える。

「警戒を緩めるな！二人一組で前後を固める！！」
ツーマンセル

小隊長がそう叫んだ瞬間、俺と同僚はすぐに背中合わせになった。なんだかんだ言っても訓練校時代から6年間コンビを組んできてい
るだけであつた。

「背中任せるぞ」

「それはこっちのセリフだ！」

俺たちは互いにそう言いあい周囲を警戒する。

先輩たちもそれぞれ二人一組になり固まっていた。

「……………」

静寂……………。

この空間を言い表すのにはちょうどいい言葉だった。
聞こえてくるのは遠くから届く爆発音と地響きだけだった。

「……………」

ガサツ！

「ッ！？」

物音一つで全員が顔色を変えて視線を向けるが、何も出てこないと
分かれると少し安堵したように息を吐いた。

そして……………

「ガハツ」

先輩の一人の胸を何か貫いているのを目にした。

「アラン!？」

すぐにその先輩のパートナーがその何かを射撃魔法で吹き飛ばすが、既に時遅く、アラン先輩は事切れていた。

「全員すぐに船へ戻れ!!」

小隊長が俺たち全員に叫び来た道を指差す。

小隊長の指示に従った俺たちはすぐさま走り出すが、先輩を葬り去った何かは執拗に俺たちを追い続けていた。

俺たちは走った

「グア!？」

「ギャアアーツ!!」

周りで次々と先輩や、後輩たちが何かによられていくのも無視して走った

息が切れようが

枝に引っ掛かって切り傷や刺し傷が増えようが

何かに頭を貫かれて倒れた副隊長を踏みつけようが

小隊長が何かに向けて砲撃を放つがソレごと呑み込まれようが

走った

だから、気が付かなかったのだろうか

俺と、俺に向かって伸びてきていた何かの間に割り込んだ同僚アイツが刺し貫かれた事に

「……………」

俺はすぐに動かしていた足を止め、アイツを受け止めた。

そして、アイツの胸を見て、俺は言葉を失った…………。

俺を庇って刺された胸には大きな孔が開けられ、そこから血が溢れていた。

「しっかりしろ！！すぐに医者に連れて…………！！」

「…………自分の…………事は、自分が…………よく分かる…………。俺は…………もう…………ゴホッ…………！！」

俺の腕の中でアイツは血を吐きながら応えた。

「お前は…………もう行け…………。お前だけでも…………生き残って…………くれ……………」

「ッ！？…………！！」

そい言って、…………はゆっくりと目を閉じた…………。

俺はアイツの身体を地面に寝かせると地面に落としていた自分のデバイスと、アイツの持っていたデバイスを手に握った。

ミッドチルダ式の支給品のストレージデバイス……。今まで俺たちと幾つもの場所を渡り歩いてきた大切な仲間……。

悪いな、お前の言う事は聞けない。

「許さねえ……！ テメエら……絶対に……！！」

ここが、恐らく俺の最期の場所になるだろう……。
だけど……

仲間を殺されて……、尊敬する上司を殺されて……

親友^{タチ}を殺されて……

「黙って死ねるわけないだろ……！！」

目の前にいる何かに向け、射撃魔法を放つ。

その数は30。

魔力量と空間把握能力だけは誰にも負けない自身がある！

「後ろ！！」

そして、俺の背中を狙っていた何かを右手に持ったアイツのデバイスを向けて砲撃魔法を放ち、吹き飛ばす。

なるほど、こいつらは動き回っている相手に対しては素早い反応を見せるが、止まっている相手にはめっっぽう弱いらしい……。

「まるでトンボみたいな奴らだな……！ブレイズカノンツ！」

俺は足を止め、一瞬で相手の位置を把握し、砲撃や、射撃魔法を叩きこんで言った。

俺たちを襲ってきた何かの体力は底なしらしい……。

あれから数十分、もう魔力は空っぽ……。デバイスもアイツのデバイスは既に砕け散り、俺のデバイスももう限界だ。

ここまでか……。

「グッ……」

ああ、痛てえな……。

見事に胸に着けてるデバイスごと貫いてやがる……

あれ？俺、倒れてるのか……？
ハハツ、なんか呆気ないな……

刺されても痛みを感じない……

ああ、これが『死』なんだな……

最後にそう頭で呟いて、俺の意識は……無くなった……。

side:??out

第零話 プロローグ（後書き）

名前の部分が伏せ字なのはそれなりの理由があるためですのでご了承ください。

感想待っています。

第一話 異動（前書き）

連日で二話目投稿です！

第一話 異動

新暦0075年5月

「てな訳で後一人でいいんです。誰かおりませんか？」

陸士108部隊、その部隊長室で機動六課部隊長の八神はやては目の前に座るゲンヤ「ナカジマ三等陸佐に頭を下げていた。

「なるほどな、流石に新人だけだと不測の事態に対応できないから、それなりの実力を持った局員を探しているって訳だな」

ゲンヤはそう言っつて湯呑に注がれていた緑茶を飲み干す。

「だが、108からはもう出せんな。ギンガは既に別件で出てるし、他にはそんな条件に当てはまる奴はウチにはいないからな……」

そう呟きながらゲンヤは顎に手を当てながら考え込む。

「そうだな……。アイツの部隊なら……」

「どうかしたんですか？」

「ああ、いや何でもない。とにかく、この事についてはこっちで何とかするから、お前さんは自分たちの事だけに集中してやっておけ」

ゲンヤの呟きにはやてが首を傾げるが、ゲンヤははやてに気にするなといい立ち上がった。

「スマンが俺はこれから少し出る用事があるが、お前さんはどうする？ギンガにでも会っていくか？」

「ああ、いえこっちも仕事を残してるんでこれで失礼させていただきます」

「そうか、すまん。何か進展があったら連絡する」

「ありがとうございます。それでは」

はやてはゲンヤに敬礼してゲンヤもそれに応じる。
はやてが去った後、ゲンヤは通信を開く。

『はいな〜どちらさんですか？』

「俺だ」

『おお〜ゲンヤ君じゃないか〜。今日はどうしたんだ？ついに娘さんに愛想尽かされたか？』

通信に出たのは銀縁の眼鏡をかけたゲンヤと同じぐらいの歳の男だった。

「五月蠅い、ギンガもスバルもそんな事にはならねえよ。それより、少し時間いいか？」

『そうだな〜、こっちも仕事があるからな〜。十五分ぐらいならいいよ〜？』

「十分だ。実はな……」

。ゲンヤが通信をつなげた相手の名は『レオン』スリザス三等陸佐
。陸士072部隊 通称『陸で一番怠け者で、働き者な部隊』
の部隊長を務める男だった。

男は夢を見ていた。

遠い遠い昔の記憶。

男が、多くのものを失う前の、きつくて、苦しくて、忙しい。だ
だけ、楽しかった時の記憶。

そして、男は今、何とも言えない浮遊感を夢の中で味わっていた。

ここで読者の皆に尋ねたい。

夢の中で階段の一番上から飛び降りたり、はたまた、つり橋の上か
ら飛び降り、見事に着地する……と言ったような夢は見たことはな
いだろうか？

そして、着地した時、目を覚まして見るとベッドの下に転がり落ち
ていると言つような経験はないだろうか？

男は今、それを身をもって経験した。

side:アデール

「痛い……」

痛たた……。

おかしいな……。俺は今まで部隊の皆と一緒にビルの上で宴会をして、飲んだ勢いで先輩が紐無しバンジーをやれと言って……飛び下りて……

「オイおっさん！」

ってワオ！？

「なんだ、ローエル君じゃないか……驚かすなよ……。おっさん寿命が縮んだかと思っただじゃない……」

「もう結構な歳の癖に木の上で昼寝なんかするなよ……腰いためるぞ？」

ムウ、歳って失礼だな……。おっさんはまだ35歳だぞ！

「三十路過ぎてる時点で結構な歳だろ。て言うか、自分でおっさんって言ってるんじゃないか」

「あらら、こりゃ一本取られたね……」

全く……ローエル君ときたら、最近になってやっとこの空気に慣れてきたと思えばもうおっさんのつぼを押さえてきてるし……。

「こりゃ、おっさんの管理局生活もそろそろ終わりになってきたのかもねえ……」

「なに何かをやり遂げたような顔してたよ、部隊長が呼んでたぞ？」

部隊長が？おっさん何かやったっけ？

「おっさん、また何かやらかしたのか？」

「いや、部隊長に借りた金は先月返したし……。部隊長の部屋から勝手に酒を持ち出したことも謝ったし……」

他に何か……あ！！

「なにか心当たりがあるみたいだな……。何やったんだ？」

「部隊長が大切にしていた盆栽を割った事まだ謝ってなかった……。まさか……それで!？」

「そんな事で呼び出す部隊長が何所に……。そうか、この部隊長はそんな奴だったな……」

「さくら、部隊長のことを悪く言うんじゃない。あれでも一応はこの部隊のトップなんだから。」

「おっさんも十分悪く言ってると思うぞ……」

「さてと、じゃあおっさんは一丁怒られてきますわ」

部隊長、怒ると怖いから……。いい年こいておっさん漏らすかと思っただからね、以前。

「骨だけは拾ってやるからな……」

「せめてそこは俺も一緒に逝ってやるって言おうよ、ローウェル君」

「いやだね、俺はまだまだこの青春を謳歌するんだ」

はあ、全く、ローウェル君も変なところはアイツにそっくりだよなあ……。

それじゃ、おっさんは少し怒られてくるでしょうかね……。

「……………」

部隊長室についてすぐだけど帰りたい。

なんかもう、部屋の中から嫌な臭いがプンプンしてくるんだよ……。そう、厄介事に巻き込まれそうな匂いがね……。

「失礼しますよ〜?」

そろそろと扉を開くと、中には物凄い笑顔の部隊長……。

ヤダもう帰りたい……

「は？異動？誰が？」

結局、おっさんは部隊長に襟を掴まれて部屋の中に連行されましてよ……

そして今、おっさんの目の前に一枚の紙が置かれたところだよ……

っていつか異動？ナニソレ、また貴方の気まぐれ？

「君だよ、君。因みに異動先は時空管理局本局遺失物管理部機動六課だから」

「機動課？超エリート部隊じゃないですか。そんなところにおっさんみたいな不真面目な局員を送り込むなんて何考えてんですか、あんたは」

「実戦になると真っ先に突っ込んで仲間に被害が出ないようにする奴が不真面目なら管理局員はほとんどが不真面目な人間だらけになるね」

やはり腐っても部隊長。こっちの言い分をあっさりと退けるとは

……

「アデイルル一等陸士、給料30%カットと……」

「あー！？そりゃないっしょ大将！！」

「じゃあ、行ってくれるね？」

やっぱりこの人には敵わないな……

「了解です……。アデイルルIIサイガ一等陸士、受領しました」

やっぱり厄介事だったよ、チクショウ……

第一話 異動（後書き）

次回、機動六課メンバー登場です。

もう一作の方も進めないと……

今回登場したオリキャラ

ローウェル君：アディールの後輩兼相棒。

最近アディールの扱い方を心得た。

容姿はぶつちやけTOVテイルズオブヴェスペリアのユーリ・ローウェル。

上の名前が判明するのはまだまだ先の話。

第二話 機動六課

機動六課部隊長室

side: はやて

「ふうん……『アディール』サイガ―等陸士』なあ……」

私は今、ゲンヤさんから送られてきた新しい人員の資料に目を通しとる最中や。

最中なんやけど……

「はやてちゃん、どうかしたですか？」

「これなんやけどなリイン」

飛んで私の肩に座るリインに手に持つてる資料を見せる。

「これって今日来る筈の新しい隊員さんの資料ですよね」

「そうなんやけど、ここ見てみい」

「えーと、どれどれ……」

おお、リインの顔がみるみるうちに驚きに染まってきたとる。まあ、そうなるやろうな。私もそうなたし。

「はやてちゃん！この人の年齢って本当なんですか!？」

「あ、そつちに目が行ったんやな……。資料通りらしいよ、何でもかなり前から武装隊やつとるベテランさんらしいで」

そう、経歴については問題ない……とは言い切れないけど、機動六課にとってこの人はかなりの戦力になるはずや。

「ただなあ……」

「どうかしたですか？」

ラインの問いに答えようとした時、部隊長室のドアをノックする音が響いた。

誰やろうか？グリフィス君かな？

「どうぞ」

「失礼します」

「なのはさん、フェイトさん！」

なんや、なのはちゃんとフェイトちゃんかいな。

でも、こんな時間にどうしたんやろうか？フォワード陣の訓練時間のはずやけど……

「二人とも、こんな時間にどうしたんや？」

「何言ってるの、はやてが私たちを呼び寄せたんでしょ」

んん？そうやったっけ？

「リン、私そんな事言ったか？」

「はいです。しっかりと朝一番に呼び寄せてましたよ？」

「あらら〜そりゃ悪いことしたなあ」

「はやてちゃん、悪いって思っていないでしょ」

「ありゃ、バレてる……」

「それよりも、どうして私たちを呼んだの？」

「実はな今日新しい隊員が来るんやけど、二人には先に教えようと思ってな」

「そう言いながら私は資料を二人に手渡した。」

「ムフフ、驚いとる驚いとる。」

「はやてちゃん！あの陸士072部隊の人が来るの！？」

「そうなんよ、ゲンヤさんも中々凄いとところの人と知り合いだったみたいやで？」

「でも、あの管理局一急げ者の072部隊だよ！？」

「……………え？」

「ちょっと待ってな、二人とも。私がゲンヤさんから聞いた話だと、072部隊は仕事が一番早くて有名やって事やったんやけど……………？」

「「え？」」

「どうにも情報の食い違いがあったみたいですよ」

ビックリや、本当にビックリや。

どれ位ビックリかと言うと、ゴラも裸足で逃げ出すくらいにビックリや。

なんや、自分で言ってる何が言いたいのかわかんようになってきたな……

「とにかく、三人共落ちつくですよ」

ムウ、ラインに諭されるとは……

「そこは本人に聞いてみるのが一番だと思っております！」

確かに、それが一番確かやろうな……。二人もその案に賛成みたいやし……

「それじゃ、アディール一士が来るまで待つとしようかな……。二人はどうする？」

「私はフォワードの訓練の様子を見に行きたいな。ヴィーたち一人じゃ大変だろうし」

「私もまだ整理してない資料があるから……」

「そうか、ならまた一時間後に来てな。その頃には多分来てはるはずやから」

「了解」

ムフフ……。中々楽しみやな、どっちの噂が本当なのかしつかりと聞かせてもらおうで……。

side:はやてout

side:アディール

ウウ!? な、何だ今の悪寒は……?

なんか嫌な予感つてものはいつでも当たるように出来てるのかねえ

……?

おっさん、さっきから嫌な予感ばかりしてるよ……

「そんなくだらないこと言っていないでさっさと行けよ」

「最近ローウェル君がおっさんの事を足蹴にすることも多くなってきたし……」

「新しい仕事場でききなり遅刻するようなおっさんに言われたくないね。それよりもマジで早く行かないとヤバいんじゃないか? もう一時間も遅れてるぞ?」

「あゝ、なんかね。もうここまで盛大に遅刻しちゃったからね。なんかもつどうでもよくなったと言うか何と言うか……」

そう言いながらおっさんはもう一度壁に掛っている時計を見る。

うん、来るように言われた時間からもう一時間も経ってる。
完璧な遅刻だね。

「そんなこと言ったらあっちの部隊長に給料カットするように部隊長が言つかも知れんぞ？」

ん〜それは困るな……。おっさんは老後のために今せっせとお金を貯めてるところだから、ここで給料カットされたらおっさんの老後の計画が狂っちゃう。

それから何気にローウェル君の部隊長に対する態度がだんだんと酷くなってるのは気のせいかな？

「それじゃ、ぼちぼち行きますかね……。はあ、行きたくないなあ……。」

「機動六課でも達者でな〜！」

後ろの方からローウェル君の声が聞こえる。

なんだかんだ言ってもコンビ組んで二年たってたからね……。寂しくもなるねえ……。

「そう言えば、機動六課って海に近いって話だったねえ……。釣り出来るかな……？」

ふと、部隊長に教えてもらった機動六課の場所の事を思い出して一人で口にしてみたけど……。一人って寂しいなあ……。

side:アディールout

side: はやて

なのはちゃんとフェイトちゃんは、あの後きっかり一時間後に部隊長室に来たんやけど……、肝心のアディール一士がまだ来とらんかった。

まあ、少し位遅れることはあるかもなと言う訳でその場で三人とリンの四人でお話し（OHANASHIちゃうで？）ながら待つとつたんやけど……待てども待ててもアディール一士は姿を現さんかった……。

そして、ついに約束の時間から二時間が経った今、私の堪忍袋の緒が切れた……

「遅ーいつー!!」

「は、はやてちゃん、落ちついて!!」

「そうだよ、はやて!何か事故があったのかもしれないし……!!」

「だからと言って連絡の一つもよこさんってあるか!？」

二人共、甘すぎやねん!もうアイスに砂糖かけてるかって言いたいくらいの甘さや!!

「フフツツ!アディール一士、初日から遅刻とはいいい度胸やないか!!分かった、あんたがそう来るなら私の方も考えがある!!覚悟しいや!!ハーツハツハツハツ!!!!」

「うううはやてちゃんが壊れたですう!!!!」

壊れたとは失礼やな、リイン。私はセイジョウヤデ？

side:はやてout

side:アディール

おっさんは今、機動六課の部隊長室の前にいる。

いるんだけど……、なんかね……ドアの隙間から黒いオーラみたいなのが見えるんだよね……

「フフフツ！アディール一士、初日から遅刻とはいいい度胸やないか！！分かった、あんたがそう来るなら私の方も考えがある！！覚悟しいや！！ハーツハツハハハツ！！！！」

……
なんか中からも変な台詞が聞こえてくるし……

と言うか、おっさんの関わる部隊の隊長はこんなのはっかりなのね

……

はあ、やっぱり嫌な予感ってのは当たるのね……

当たっても嬉しくないけど……

「と言うか、この扉って確実にあの世への片道電車の入り口だよな

………」

『我関せず』

わお、おっさん、自分のデバイスにも見捨てられちゃったよ……

はあ、こりゃ腹括るしかないのかね……？

第三話 おっさん(前書き)

更新遅れてすいませんでした。

しかし、作者はまだ学生なので、この時期には期末試験と言つ通過儀礼がありますのでご了承くださいませ。

それでは

第三話 おっさん

side: はやて

あの後、私はイライラオーラを漂わせながら部隊長室の机の上に碇ゲン ウさんみたいに手を組んでいた。

それにしてもアディール一士、ホント遅いわ。いつまで待たせる気なんやろうか？

コンコン！

ん、来おったな！アディール一士！！

「どござ」

さあて、どんな顔ツラして来たんやろうな……。

楽しみやわ。

私はその時そう思いながら開くドアを見つめていた。

机のそばに立っているなのはちゃんとフェイトちゃんや、リインも同じようにドアを見ていた。

そして、そこに入ってきたのは……

「どうも、今回陸士072部隊から出向になりましたアディール」サイガー等陸士であります。不束者ですがよろしくお願いいたします」

おっさんやった。

おっさんを絵にかいたような人やった。

ボサボサの髪、半目に開いた瞼、やる気のない瞳。

もう休日に家でゴロゴロしてそんな雰囲気のおっさんやった。

「丁寧ありがとうございます。私はこの機動六課部隊長を務めています、八神はやて二等陸佐です。そしてこっちが私の融合ユニオンデバイスの……」

「リインフォース？空曹長です！よろしくです！！」

「こちらこそよろしくお願ひします、空曹長殿」

そう言っつてリインの差し出した手を優しく握るアディール一士。なんや、遅刻してくるからどんな人やろうかと思っただけど、結構礼儀正しい人やんか。

「そして、こちらの二人が機動六課の前線部隊の隊長たちです」

「スターズ分隊隊長の高町なのはです」

「ライトニング分隊隊長のフェイト・テッサ・ハラオウンです」

「かの有名な管理局のトップエースの貴方達に会えて光栄です。これからよろしくお願ひします」

「さてと、互いの自己紹介も終わったことだし、アディール一士」

「なんででしょうか？」

アディール一士は私が名前を呼ぶと背筋を伸ばして私の顔を見る。

なんかホントに疲れ切った顔しとるなあ……ゲフンゲフン！

「いえ、大したことではないんですけど。その敬語って使い辛くありません？どう考えても私たちよりも貴方の方が年上ですから、無理して敬語使わなくてもいいですよ？」

おお、驚いとる驚いとる。

まあ、そうなるやろうな。管理局は一応、軍属みたいなもんやからいくら上官からの提案でも下のもんはそう言った事は中々できへんしな。

「あ、そう？いやあ助かったわ。おっさん敬語って苦手ですあ」

「」「」「順応早ッ！」「」「」

いや、ホンマに早すぎやろ！？

さつきちよつと悩んだのはなんだったんや！？

「部長長？」

「ハッ！？んん！何でしょうか、アディールさん？」

「いや、おっさんの事はアディとでも呼んでくれないかね？アディールって長いから言いにくいでしょ？それに、そっちは年下とはいっても一応上官だからさ、敬語は使わなくてもいいんだとおっさんは思っただよね」

今気づいたんやけど、アディール……アディさんって自分の事を
おっさんって言うんやな。

そんな人、ミッドにも地球にもおらんかったから少し新鮮やな。

「そうやね、ならアデイさんとも呼ばせてもらおうかな。あの私の事はやてって呼んでくれても買わんで？二人はどうする？」

「うん、私もアデイさんかな？」

「私はアデイで」

「うんうん、管理局のトップエースたちに名前を呼ばれるようになるなんて、おっさん夢みたいだよ」

「なんや、アデイさんって結構親しみやすい人なんやな。それよりも聞かなあかんことがあったんやっとな。」

「アデイさん、二つほどお聞きしてもいいかな？」

side: はやてout

side: アディール

「やつほーみんな、今おっさんは管理局のトップエース三人と自己紹介をしたところだよ。」

「え？なに、知ってるから早く進めろって？」

「アデイさん、二つほどお聞きしてもいいかな？」

「おっと、はやてちゃんからのご指名だ。」

「一体何が聞きたいんだろうね？」

「いいよ、プライベートにかかわらない程度ならね」

ま、おっさんのプライベートなんて知りたくもないだろけどね

「じゃあ、まず最初にアデイさんのいた072部隊の事なんやけど……。管理局一の怠け者部隊や、働き者の部隊って言われてるらしいけど、どっちが本当なん？」

あゝ、その事が……。

これって何所に行っても必ず聞かれるんだよなあ……

「あゝ、その二つなだけどね、どっちも正解なんだよね」

「」「」「え？」「」「」

驚いてる驚いてる。

まあ、いつも通りの反応だ。

そして、その理由を聞いた後の反応もいつも通りなんだろうな。

「その理由なんだけど、072部隊は元々はある部隊から派生して発足した部隊だって言う事は知ってる？」

「？そっだったんですか？」

なのはちゃん、流石にもうすぐ二十歳前だと言うのに、その首を傾げる動作は些か子供っぽいと言うか……。

「まあ、その事はあまり関係ないんだけど……」

「関係ないんかい!？」

おお、はやてちゃんは生粋の芸人魂を持つてるみたいだね。

「それで話は戻るけど、分岐した時に072部隊の隊長に就いた人が仕事をさつさと終わらせたら当直以外は終業までは自由に時間を過ごしていいと言ったのさ。そしたらもう隊員の皆は午前中に書類仕事を終わらせるように必死にやるようになったのさ」

「それが管理局一の働き者の部隊の理由？」

「そ、でもう一つの方はもう分かると思うけど……。余りにも仕事が早すぎて自由に過ごす隊員が多すぎるからそんな風に呼ばれるようになったわけ」

いや、おっさんはあの部隊の最初期のころからいたけど、今考えると凄いとこにいたんだね。

「なるほどなあ……。まあ、一つ目の疑問はこれで解決と言う訳でいいな、二人とも？」

「まあ……」

「何か釈然としないけど……」

「それじゃ、おっさんは荷物の整理を……」

「ちよつと待ったあー!!」

おっさんは話が終ったようだったので部屋を出ようとしたのだけど……。なんかはやてちゃんにむっちゃ睨まれてる……。

まあ理由は考えなくても分かるんだけどね。

「まだ何かあるのぉ？」

「なに嫌そうな顔してるんや。自分、遅れてきた理由聞いとらん？」

ヒイ！？なんかはやてちゃんの背後に般若が見える！？

「ほらほら、正直に話してみ。大丈夫、ちゃんとした理由なら私は怒らんから」

嘘だ！！なんて言ったら確実に潰されるだろうなあ……物理的に。

「はあ、ネヴィリウム。映像頼む」

はやてちゃんが暴走する前に早く事情を説明しなければ！！

そう思っておっさんは首から下げたリングの姿で待機しているおっさんのデバイス、『ネヴィリウム』に声をかけるが……

『……………』

あれ？

「おーい、ネヴィリウム？」

『……………』

「なんや、反応せんな？」

こいつ、ご主人様に向かってそんな態度を取るのか!?

『面倒、寝る……』

「……………え……………?」「……………」

一瞬だけ聞こえた機械音声と、そのセリフの内容を理解し得なかったおっさん以下4名。

「アデイさん、自分のデバイスをまで見捨てられるとは……………。哀れやな……………」

止めて!?!おっさんをそんなかわいそうな者を見るような目で見ないで!!

「ま、それはそれや。さっさと白状してもらうか?さもないと……………」

そう言いながらデバイスを展開してその切っ先をおっさんに向けてはやてちゃん。

つてちよつと待てよ……………?

確かはやてちゃんつて広域殲滅型の魔道師じゃ……………?

「ちよつとタンマ、タンマ!!そんな物騒なモン出さないでよ!!

「じゃあキリキリ吐かんかい!!

うう、仕方ない……………。余り言いたくなかったんだけど……………

「じ、実は……………」

「実は？」

「朝起きたら目覚まし時計の電池が切れてて、急いで準備して行くとしたら靴ひもが切れて、靴を変えて走ってここに向かっていたら大荷物持ったお婆さんが横断歩道を渡ってたから手伝っていて、そして朝飯代わりの油揚げをトンビにさらわれてそれを取り返してたら遅れてしまった……と言う訳です」

静寂……

これはなんていうか、あれだ。『嵐の前の静けさ』と言うやつだ。

「アホか！？最初の二つはまだ不可抗力だから仕方ないし、三つ目のは人間として正しい事やから何も言わへん。けどな、最期のはなやん！？トンビに油揚げをさらわれた！？んな諺の通りの事が起こる訳ないやろうが！！と言うかミッドチルダにトンビっておったんかい！！！」

「まアまア、落ちついてはやてちゃん」

「これが落ちついていられるかぁ！！！」

ムウ、何に怒ってんだろ。

あ、アレか。おっさんがまだ隠していた事に気が付いて怒ってんだな？

「それに正確に言うとトンビじゃなくてシンジュトビだ」

刹那、おっさんの視界が白い何かで埋め尽くされ、そこでおっさんの意識は闇へと沈んだ。

第四話 顔合わせ

side:アディ

「あゝ痛い……」

その後、すぐに意識を取り戻したおっさんの全身を鈍い痛みが襲った。

全く、ネヴィリウムが即席の防御魔法を発動してなかったらどうなってた事やら……。

「アハハ、ごめんなアディさん。私もついカツとなってやってしまったんや。勘忍な」

「あのね、おっさんはもう結構年喰ってたから気をつけてよ」

本当にこの娘はあんなところで魔法を撃つなんて、その頭の中を見てみたいわ。

「二人とも、そろそろ着くからおふざけはそこまでにしてくれないかな？」

「ちよ、なのはちゃん、おふざけて無いと思うんだけど……」

おっさんにとってはとっっても重要なところなんだけど……

「そのセリフはその笑顔しまつてからにしときゃ？」

「ナイスツツコミ、はやてちゃん！」

「いや、それほどでも」

そう言いながら頭を掻くはやてちゃん。

なんだろうね、072の時のローウエル君の時とはまた違ったハマリ方だね。

うん、おっさんの歳がもう少し若ければ彼女とならお笑い芸人としてやってけたかもね。

「ところで、おっさんはどこに向かっているんだい？」

「訓練場だよ。今はフォワードのみんなが訓練をしている時間だからね」

おっさんの目を歩いていたフェイトちゃんは振り返りながら丁寧に教えてくれる。

と言うか、その流れだとおっさんの配置部署もなんとなく予想出来ちゃっただけだ……。

「まあ、そこでみんなに紹介するって形かな。ちょうど今日は副隊長の二人もいるし」

「ところで、どうしてアデイさんはキョロキョロしてるんですか？」

「いやね、流石新設の部隊だなあって思ってね。前いた部隊じゃこんなきれいな隊舎はあり得なかったからね」

リンちゃんの質問におっさんは溜息を吐きながら答える。

いや、本当、機動六課の隊舎は綺麗だね。

「どう言う事なの？」

「ああ、さっきの話しに関係してるんだけど、自由時間を模擬戦なんか^{バトルジャンキー}に使う戦闘狂が何所そこ構わずにやりまくってその余波で隊舎にガタがきまくっていたってこと」

「え？訓練場とか無かったの？」

まあその反応が普通だよな。

「あるにあるんだけど、何しろ隊舎自体がもうかなりボロかったからね。訓練場なんてもつと悲惨な状態さ。そんなところで魔法をぶつ放せばどうなるか分かったもんじゃない。だから部隊長は屋外での訓練を命じたんだ」

「？屋外って？」

「屋外は屋外さ。近くにただっ広い空き地があつてね。そうだね……六課の隊舎の敷地の半分くらいの土地かな。そこで訓練をするようになったんだけど……」

「だけど……？」

「バカな砲撃魔がバカス力砲撃ぶちかますせいで072の隊舎はボロボロのボロボロにね」

「……」

「な、何で私を見るのかな三人とも……？」

おっさんの言葉を聞いたはやてちゃん、フエイトちゃん、リインちゃんが一斉になのはちゃんの方を見つめ、その視線に何かを感じたのはちゃんが反論するが、その言葉に答える者はいなかった。なんていうか、今の三人の反応でなのはちゃんの戦闘スタイルが大体分かつちまったよ……。

「はい、みんな集合！」

あれからまた暫く歩いておっさんたちは訓練場と呼ばれるスペースにたどり着いた……。いや、訓練スペースって聞いていたが、まさかホログラムを使ってるなんて思ってもいなかったよ……。これ一台072に譲ってくれないかな？

「物凄く高いで？」

「大将の懐では無理だね。諦めるわ」

これで隊舎の崩壊に怯える隊員たちを開放してやれると思ったのに……、ちくせう……。

「と言う訳で今日からみんなと一緒に働くことになったアディール」「サイガー等陸士だよ。アディさん、自己紹介よろしくお願いしますね」

おっと、いつの間にか目の前に疲れ果てた四人組のチビっ子ズが

並んでいたよ。

「紹介にあつたアディール」サイガー一等陸士だ、気軽にアディさん
とでも呼んでくれ」

まあ自己紹介としては無難な方を選んだけど、大丈夫だよな？

「それじゃ、ティアナから自己紹介をお願い」

なのはちゃんは列の一番左に立っていたオレンジ髪のお嬢ちゃん
に視線を向ける。

「はい、スターズ分隊所属のティアナ・ランスター二等陸士です。
よろしくお願いします」

「同じくスバル・ナカジマ二等陸士です！」

うん、なんかね、もうこの部隊って結構おっさんと因縁がある人
達で揃ってるんじゃないかな。

ナカジマってのは余り縁がないけどランスターって名前には同姓が
いなければおっさんとかかなり強い結びつきがあるんだよね……。

「ライトニング分隊所属のエリオ・モンディアル三等陸士でありま
す！」

「同じくキャロ・ル・ルシエであります！」

「うん、みんな元気がよくていい子たちだね。おっさんはもうそん
な元気は出ないけどね」

「みんなの前でそんなネガティブな考え方にならないですよ……」

「ほんと、はやてから聞いてた通りのおっさんだな」

「おろ？そう言ってお嬢ちゃんはどちら様？」

さっきの紹介には出てなかったなんかハンマー持った物騒なお嬢ちゃんが呆れた目でおっさんを見ていた。

「お嬢ちゃんじゃねえ、スターズ分隊副隊長のヴィータ三尉だ。あまり気抜き過ぎると後ろからぶった叩いてアイゼンの頑固な汚れにしてやるからな」

「だからおっさんの身体はもう全盛期じゃないの。盛者必衰の理って言葉知ってる？」

「知るか、言っとくがあたしは容赦しねえからな」

「ああ、さらば我が平穩の日々よ……」

「何黄昏てるんや、それよりヴィータ、シグナムは？」

なんかこの部隊のおっさんの扱いが少し雑なのは気のせいかな…

…？

「シグナムなら……噂をしたらきたぞ？」

「すみません、遅れました」

おっさんは後ろから聞こえてきた声に反応して後ろを振り向いた

んだけど……。

「……………ッ！？」

そこにいたのは桃色の髪を背中で一まとめにし、凜々しい顔でこちらに歩いてくる女性だった。

そして、その姿が俺にはある女性の姿がダブって見えた。

「お前か、主はやてが言っていた新しい人員とは。私はシグナムだ、一応ライトニング分隊の副隊長と言う事になっているが、これからよろしく頼む……？どうかしたのか？」

「あーいや、何でもない。こちらこそよろしく」

イカンイカン、おっさんとした事がついボーっとしてしまった。たよ。

そう思いながらおっさんはシグナムが差し出してきた手を握り返した。

「うん、これで一通りの自己紹介は済んだね。それじゃ、アディさん」

「ん？」

「これからちょっと模擬戦をやってもらいます」

「……………へ？」

何だかねえ……。やってきていきなり模擬戦は無いですよ、なのはちゃん。

おっさんは何度も言うけど歳より何だからさ、もうちよつと労わろうと言つ気持ちはないのかねえ？

「労わるも何も、遅刻してきた人に拒否権はないで？」

「それを言われると言い返せないね。はやてちゃん、性格悪いって言われたことない？」

「酷いなあ、アデイさんはそう思つとるちゅうことやね？」

そりゃ、そう言うセリフを笑顔で言える時点で性格悪いって言われるだろうね。

「グダグダ言つてないでさっさと行つて来い！！」

「痛た！？ちよ、危ない！分かった！分かったからその巨大な金槌で殴らないで！！」

だからもうちよつと歳よりを労わる事をね……わ、分かったからなのはちゃん、そんな物騒デバイスな物をおっさんに向けないで！！

はあ、ま、やるからにはビシツと決めないとね。

久しぶりに気合い入れて行くでしょうかね。

第五話 模擬戦 1

side:アデイ

はあ……、どうしてこうなっちゃたんでしょう？

ここ機動六課に来て遅刻し、怒られ、説明し、砲撃され、自己紹介され、金槌で殴られ、訓練場に来てしまったけど……。

「あれ？と言うか、まともな事って自己紹介位しかないんじゃない？」

『自業自得』

うん、まあネヴィリウムはこう言った性格だったことは最初から知ってたけど、改めて言われると腹立つわぁ……。

『アデイさん！準備ができたのでセットアップしてください！』

「オーケー！」

いかにも技術部担当って感じのシャーリーちゃんに言われて首に掛けてるネックレスの状態のネヴィリウムを取り出す。

そう言えばさつきシャーリーちゃんがネヴィリウムを少し調整してたみたいけど、この模擬戦に関係する事なんだろうか？

「みんなの前だからおっさん張りきっていくよ。ネヴィリウム？」

『準備完了』

「おっしや。ネヴィリウム、セットアップ！」

『装着』

おっさんの声とともにネックレスが光り出し、足元に魔方陣が浮かび上がりおっさんの身体を包みこむ。

さて、どんな奴が相手なのかねえ……

side:はやて

「部隊長、あのアデイさんはどんな戦闘スタイルなんですか？」

「確か中距離からの射撃戦やったな、ライン？」

「はいですっ！」

私は今、フォワードメンバーと一緒にあるビルの上におる。もちろん、アデイさんの模擬戦を見るためや。

「まあ、どんな風に戦うのか、どれほどの実力を持つのかはこの模擬戦を見ればよく分かるやろ。だからしっかりと見とき？」

「」「」「はい！」」「」

うん、みんな素直で宜しい。

私はそう思いながら下の方でガシガシと頭を掻きながらデバイスに離し掛けるアデイさんを見る。

けど、さっきのシグナムを見た時の反応は何やったろうな。

他のみんなは気づいとらんかったようやけど、私の観察眼からは逃れられんで。

何時か聞いてみよう。

「アデイさん！準備ができたのでセットアップしてくださいー！」

『オーケー！』

おっと、もうすぐ始まる見たいやな。

あ、アデイさんがセットアップする見たいや……って？

「あの魔方陣って！？」

「我らと同じ古代ベルカ式か！」

これには驚きや……。古代ベルカ式はただでさえ適合者が少ないのに、その中の射撃型ってのはまたかなり珍しいのに……。

「やっぱりバリアジャケットと言うよりもあたしらの騎士甲冑と似てんな」

「あれは、籠手に弓か……？」

アデイさんの姿が彼の魔力光であるう緑色の光から出てくる。

その姿はどことなく地球の西洋の騎士と似通っていた。

その左腕には幾つもの突起がある籠手、そしてその左手には美しくも力強い弓が握られてた。

「うん、アデイさんも準備完了。なら、レディー……」

シャーリーの近くでなのはちゃんが空へ向け手を挙げそれを振り下ろした。

「ゴー！」

訓練開始や。

side:アデイ

「さてと、模擬戦内容はこいつらの破壊、または捕獲か……」

『肯定』

模擬戦が開始されて数秒後、いきなりおっさんの目の前の地面に魔方陣が浮かび上がってそこからなんか丸っこい奴らが出てきた。

『それはガジェットドローン、私たち機動六課の回収目標である』
『リック』を探しまわって回収することを目的とされた機械兵器です』

「なるほど、つまりこいつらがおっさんの今回の敵って訳？」

『その通りです。見た目弱そうに見えますが、結構しぶといですよ？』

えー？おっさんの目にはそうは見えないんだけど……。

ただどま、ここはガジェット対策については先輩の話は聞いておきますかね。

「ネヴィリウム」

『目標捕捉、アクセルシューターセット』

まずは小手調べ！

「行け！」

『発射』

おっさんの魔力で精製された緑色の魔力弾がガジェットに向け放たれる。

その数、30。たかが6体に対してこの数は多すぎる気もするが、相手に容赦はしないのがおっさんのポリシー何だよね……って、ええ！？

「打ち消された！？」

『分析……完了。対魔力防壁の類のものを感知』

ああ、これが資料にあったAMFってやつね。

全く、どこのだれかは知らんが、面倒なモン造ってくれちゃって…。

「とはいっても、伊達に長く前線で身体張ってないんだよね。ネヴィリウム」

『了解。カートリッジ装填』

「ハボックゲイル！」

ネヴィリウムの声に合わせておっさんは魔力を放出し、自分の周りに小さい竜巻を幾つか発生させ、それを一つにまとめる。塵も積もれば山となる。

この言葉を体現化したような魔法の一つだよね、これって。今、ガジェットに向かって行った竜巻は既に10mほどの高さまである。

あ、ガジェットが飛ばされた。

「よし、今のうちに……」

ガジェットが飛ばされてる間におっさんは掌に魔力を集中させる。次の瞬間、そこに6本の緑色の矢が生み出され、おっさんの手に握られる。

「多重弾核を真似してみたけど、なんて言えばいいのかねえ？」

『多重殻矢』

「語呂が悪い、却下。もうハウリングアローでいいや」

『…………』

「ちょ、何よそのだんまりは…………。」

「ハウリングアロー！！」

おっさんの放った矢は目標を逃がさずに捉え、その胴体に襲いかかる。

受け止められるかもって心配はあったけど、そこは年長者の知恵で訳で備えをしたのよ。

そのおかげで、ガジェットを楽々と貫いたし。

『撃破確認』

「フイ、おっさんもたまにはやるでしょ？」

『肯定』

「ま、おっさんも今回はちょっと張りきっちゃったし、これで終わりでいいよね？」

『注意、増援』

「…………へ？」

ネヴィリウムの声に反応して後ろを振り返ると、なんかでっかいのがいたよ…………。

おっさんは歳だからあまり無茶な模擬戦はしたくないのに…………。

おっさんがそう思っている間に、デカ物のアームがおっさんに向け

て振り下ろされた。

第六話 模擬戦 2

side: はやて

「ねえはやて、今アデイさんが使った魔法ってなに？」

「私も戦技教導官やって結構経つけど、あんな魔法は見たことないよ」

フェイトちゃんとなのはちゃん不思議そうな顔して聞いてくる。まあ、そうやるうな。私も文献で読んだりして存在そのものがある事は知つとつたけど、実際に見たのは初めてやしな。

「私も聖王協会のほうである本に書かれてたことしか知らんけど、アレは風の変換資質持ちだけが扱える魔法や」

「風の変換資質？」

「そ、管理局が動き出して早70年近く、その資質を持った魔道師は確認されたのはたったの4人だけと言われとる少なさの資質や。所謂レア物っちゅうやつやな」

私もまさかアデイさんがその風の変換資質持ちだったとは思ってもおらんかったけどな……。

ホンマ、アデイさんが来てくれて助かったわ……ってなのはちゃん！？

「なにしとるん!？」

「え？折角だからもうちょっと戦い方を見せてもらおうかなって」

「はあ、そんならすっかりと戦闘データを取つといてな。後で色々聞きたいことも出るかもしれんし」

「了解」

はあ、なのはちゃんのこの癖はどうかせんとあかんあ。

ほら、アデイさんなんかもう模擬戦は終わったとおもつとるで？
アデイさん、頑張りや？

side：アデイ

危なツ！？

いきなり何すんのよ、このデカ物は！？

「ネヴィリウム、もう一度ハボックゲイル！」

『了解、ハボックゲイル』

おっさんの指示に従ってネヴィリウムが再びおっさんの周囲に竜巻を発生させ、デカ物に向かわせる……が、

「あらら〜？どうして飛んで行かないのさ！？」

『重量オーバー』

うん、とっても単純かつ分かりやすい説明ありがとう。
ちっとも嬉しくないけどな！！

「ああ、もう！何でこんな厄介な奴がいるのさ！！」

恐らくはなのはちゃんだろう……。終わったら嫌がらせしてやる
！！

「おっと、危ないなもう……」

ありゃ一発貰ったらおっさんは撃沈するだろうね。

何度も言うけどおっさんはもう若くないからあんな重い一撃に耐え
切れる身体してないからね。

「と言う訳で、一旦距離置いとくかね」

もうあんな奴と接近戦でやるうなんて考えられんわ。

大体、おっさんは元々近接戦闘は得意じゃないんだからさ！！

「いや、デカ物らしく足が遅い奴で助かったよ……」

ホント、さっきの小さい奴らだったら距離は取れてなかったかも
ね。

「それじゃ、いつちよやりますか……」

『カートリッジ装填、アーチャー、1番から6番起動確認』

ネヴィリウムの声に合わせて左腕の籠手から空薬きょうが一発吐
き出される。

これって二発しか入らないから面倒なんだよね……。

「アーチャー、1番から6番、正面の敵を切り裂け！」

おっさんの命令と同時に、左腕の籠手から六つの突起物 独立起動端末、まあおっさんは格好よくアーチャーって呼んでるけど
がデカ物に向かって飛翔する。

射出されたアーチャーは未だ竜巻の中で粘っているデカ物を切り裂かんと竜巻の中へと突入して行く。

とは言ったものの、アーチャー^{あれ}って普通に風も切り裂くから竜巻なんて意味ないんだけどね。

「さて、次は……」

アーチャーによってデカ物に大小の損傷が作られる中、おっさんは再び右手に魔力集中させる。

それと同時に、頭の中でそれが燃え上がるようなイメージを浮かべる。

「よし……、アーチャー、1番から6番、対象を捕縛しろ……！」

おっさんの指示に従うように、荒れ狂う風のようにデカ物を切り刻んでいたアーチャーがデカ物を捕縛する。

「燃え上がれ……、行け！」

デカ物が捕縛されたのを確認して、おっさんは右手に精製された多重弾核製の矢をネヴィリウムに添え、デカ物に照準を向けそれを放った。

放たれた魔力矢は燃え上がりながら一直線にデカ物に向かっていきそのボディに吸い込まれていった。

「ランページホルケーノ
荒れ狂う炎の嵐……」

おっさんが言い終わると同時にデカ物が中から弾け飛ぶ。

「ふう……流石にこれ以上は無理だね……。なのはちゃん、増援を出すなら先に言っておいてよ……」

『あれ！？バレてたの！？』

「やっぱり君だったんだ……」

『にゃ！？アデイさん、鎌掛けるなんて酷い……』

「とにかく終わってもいいかな？もうおっさんクタクタだよ……」

『あ、はい。模擬戦終了です、お疲れ様でした』

ふう……異動初日からこんなに疲れたのははじめてだよ……。
ああ、早くフカフカのベッドで寝たいよ……。

簡単に言つと、フカフカのベッドで寝ることはできなかった。

何でだろうね、ここの布団に入っていると眠るところかだんだんと目が冴えてくるんだよ……。

まあ、理由は分かってんだけど……。

「はあ……」

因みにおっさんは今、隊舎寮の屋上にいる。

カップ酒片手に持つてね。

酒は心の清涼剤って言つけど、この言葉には同感だと言つておく。

「何でだろうな、おっさんは……俺は……もう振り切ったつもりだったんだけどな……」

頭に浮かんでくるのは、もう二十年も前に別れた最愛の女性^{ひつ}。

今日の朝までその事について思いふけたことはなかった。

だけど……、模擬戦の直前にシグナムを見て、俺の記憶……楽しい事、嬉しい事、怒ったこともあった、だけど最悪なものとなった記憶が呼び起こされた。

「俺は……どうしたらいい……？マオ……？？」

気が付くと、俺は、二十年前に二度と会う事すら願えなくなった最愛の女性^{ひつ}の名前を口にして……

第七話 騎士と弓兵

side:アデイ

「ふへ〜、結構な量の訓練こなすんだね〜？」

「うん、まずは基本をしつかりと押さえていかないとね」

おっさんが機動六課にやってきて三日目、新人達の訓練を見ていてちよっと思つた事があつてなのはちゃんに頼んで訓練内容を見せてもらつたけど……

「ちよっ人多すぎやしない？」

そう、多いのだ。

初めはおっさんの見間違いかと思つたんだけど、目をこすつても虫眼鏡で見ても変わりなし。

よくこんな量の訓練をスバルちゃんたちはこなしてるよね……。

おっさんがやったら次の日は筋肉痛で動けなくなるわ、割とマジで。

「ううん、これ位やっておかないといざつて時に対応できないからね」

そしてこれ、訓練をやる方もやる方だけどやらせる方もどうかしてる。

「けど、今の新人達は訓練が終わつた後にはいつもバテてるよ、そのタイミングでそのいざつて時が来たらどうするのさ？」

「そんな時のためのアディさんだよ。資料にも、しっかりと書いてあったからね」

「え？なんて？」

「『一人でも目標を達成し、帰還できる歴戦の魔導師』って」

あゝ、そついや大将がそつ言つてたな……。怨むぜ、大将……。

「まあ、頼られるのは嫌じゃないんだけどさ、ほどほどにしてよ？
気が付いたら周りが敵だらけつてのは嫌だからね？」

「分かつてますよ、そのために隊長陣も待機しているんですから」

「ならいいんだけどさ……。お、来たみたいだよ？」

おつさんとなのはちゃんが話しこんでいる間に新人たちはウォーミングアップのランニングを終えたみたいだった。

「あ、アディさん、今日も来てたんですか？」

「うん？まあおつさんは基本仕事は早い方だからね。今日の分はすぐに終わるからいいのさ」

「だったら一緒にやりませんか？」

「スバルちゃん、君はおつさんに死ねと言つのかい？」

ホント、そんなのは御免だからね。あんな訓練内容でやつたらお

っさんは死んじやうよ。

「え〜、一緒にやりましようよ〜?」

「しつこいな〜、そんなに訓練に就き合わせたいなら自主連の時にしなさい!」

「コラスバル、いい加減にしなさい!」

おっさんの制服の袖を引っ張り何とか訓練に引きずり込もうとしていたスバルちゃんの頭をティアナちゃんがスパーン! って言う感じの音がするほどの強さで叩いた。
うん、アレは痛そうだね。

「すみません、アディールさん。うちのスバルが迷惑をかけて……」

「あ〜、いやいいんだよ? 元気があるのはいいことだからさ。それじゃ、訓練頑張ってる〜」

さ〜て、今日はみんなどんな感じになるかな〜?

おっさんはそんな事を考えながら海辺の道を歩いていった……。この後、自分の身に何が起きるのかも知らずに……。

魔法少女リリカルなのはStriker's 天駆ける蒼穹 第七
話 訓練の意義

目の前にあるのは剣、使い手の敵を切ると言う一つの目的のため

に作られた至高の一品。

手にする物は弓、目標を射抜くといった一つの目的を果たす為に作られた至高の……

「何をブツブツ言っている、早く構えろ」

「……………一ついいかな？」

おっさんは手を挙げ目の前で騎士甲冑と言う名の素敵なドレスを身に纏った女性に尋ねる。

「何でシグナムと模擬戦をしないといけないんだ？」

「何を世迷言を、簡単な事だ。私がお前と闘やりたいからに決まっている」

うわあ、何とも単純な……。シグナムはあれだ、所謂バトルジャンキー戦闘狂と言う者だらう……。
と言うか、何も性格までマオあいつに似無くていいのに……。

「…………その言葉、ベッドの上でなら言い響きなんだけどね…………」

「なっ ……!?」

流石にここまで似てはいないだろう。

うん、なんか顔真つ赤にしてるね、よかった。そこまでマオとは似てないようだ。アイツときたら『だったらそっちでもいいわよ』なんて言ってくるから困った困った…………って。

「シッ!?!」

「ちょッ ……!?!」

いきなりなんなのさ!?! って!?! 今の本気で切るつもりだったで
しょ!?!

「一度貴様に騎士道のなんたるかを叩きこまねばならんようだから
な……………」

「いや、大体おっさんは騎士^{ナイト}じゃなく弓兵^{アーチャー}なんだけど……………」

「問答無用ッ!?!」

シグナムはおっさんの言葉を無視して手にしたレヴァンティンをおっさんに向けて振り下ろした……………。

side:out

「危な!?!」

「ほっ……………!?!」

シグナムの一撃をアディはギリギリのタイミングで回避した。

その動きにシグナムは感嘆の声をあげた。

剣の将とも呼ばれる彼女の剣をギリギリとはいえ避けた彼を少しは見なおしたと言った感じの声だった。

「ちょ、ホント危ないって!?! いくら非殺傷とはいっても当たったら
痛いんだから!?!」

アデイは体勢を整えながらシグナムにそう叫ぶ。
その様子は必死と言っても過言ではなかった。

「それはそうだろう、刃を潰しているから鈍器で殴られるような鈍痛が襲うはずだからな」

「だったら　！？」

「だが、それとこれは別だ。まずは貴様のその根性を叩きのめすのが先決だ」

シグナムはその身体から一瞬だけ殺気をアデイに向け飛ばす。彼女は闇の書の守護騎士として長年戦場を駆け巡ってきた猛者、その彼女が放つ殺気は並の人間では浴びるだけで気を失う物であった。だが、アデイとて既に二十年近く管理局員として前線を張っていた猛者の一人だ。

シグナムほどではないが、その身体には戦場での経験が刻み込まれていた。

彼女が殺気を放った瞬間、アデイはネヴィリウムを展開しシグナムと距離を取り、自身の周囲に大量の魔力弾を精製する。

彼の判断は正しいものと言える。

本来、弓兵とは距離を取って相手に反撃の機会を与える前に敵を撃つという戦法を得意とする者だ。

接近戦のエキスパートとも言える騎士とタイマンを張って生き残ろうとするのは弓兵にとってはタブーな行動なのだ。

「シュート……ッ！」

アデイの合図とともにシグナムへと殺到する魔力弾。

相手に攻撃の隙を与えずに撃破、これが弓兵の戦い方だ。

彼の取った戦法は確かに正しかった。
だが……、

「甘いつ！」

『Explosion.』

「紫電一閃ッ！」

シグナムは幾度もその死線を潜り抜けてきた猛者、そんな彼女に並の攻撃は通用しなかった。
シグナムの放った斬撃がアディに迫る。

「クツ！アーチャー！！！」

アディの呼びかけに答えるかのように、彼の左腕の籠手から六つの剣片ヒットが射出され、それ自体が意思を持った盾のようにアディをシグナムの斬撃から庇うように入り込む。
だがシグナムの斬撃はそれを容易く弾き飛ばしアディを叩き切ろうとしていた。

「ネヴィリウム！！！」

『Dagger form.』

そして、アディはその斬撃をネヴィリウムで受け止めた。
シグナムはネヴィリウムの姿を見て目を見開いた。
アディの手には先ほどまで握られていた弓は無く、その両手にはネヴィリウムの意匠と酷似した二振りの短剣が握られていた。

「貴様、接近戦はしないのではなかったのか？」

「勘違いしてもらっちゃ困るね、俺は接近戦をしないんじゃない、苦手なだけだ」

アデイはそう言つと力で無理やりシグナムを押し返した。

「さてと、この形態でやるのも久しぶりだ。悪いけど肩慣らしに付き合ってもらつよ？」

「フツ、望むところだと言わせてもらつ！」

アデイが不敵に笑い、シグナムは楽しそうな笑みを浮かべる。そして、同時に地を駆け出していった。

第八話 模擬戦をする時には周りに気を使いましょう

side:out

森の仮想空間を展開した訓練場に金属同士が叩きつけ合う音が響く。

剣と短剣、炎と風、斬撃と砲撃がぶつかり合い生み出した轟音だ。アデイとシグナム、性格も戦い方も180度違う彼らだったが、今現在、その心の中で思っている事は一致していた。

『やるからには全力で』

今、この二人の頭の中にはこの事しか残っていなかった。

それ以外は不要、余計な物は模擬戦……否、神聖な試合にとっては邪魔になるだけ。

二人はただ単に、己の力、己の技術、己の魔法を駆使して相手を叩きのめすことだけ考えればよかった。

「ハアッ!」

「ソイヤッ!」

シグナムがレヴァンティンを叩きつけるように振り下ろすと、アデイはネヴィリウムをレヴァンティンの剣の腹にあてその剣先を逸らす。

レヴァンティンを逸らされたことでわき腹がガラ空きになったシグ

ナムにアディはすぐさま蹴りを入れるが、彼女が直前に張った障壁に阻まれる。

が、その衝撃まで防ぎきれるものではなく障壁を張った上からシグナムは約10mほど後方まで弾き飛ばされてしまう。

「クツ!?!」

『Accelerate shooter.』

体勢を立て直したシグナムはすぐさま横に跳び、その場から退避した。

その直後、彼女が先ほどまでいた場所に15発程度の魔力弾が連続で撃ち込まれた。

「チイ!」

離れた場所からシグナムが仕留められていないことを確かめたアディは短剣状にしたネヴィリウムを構え周囲を警戒する。

「ハア!」

「おお!?!」

そして、彼の死角から現れたシグナムの剣撃をネヴィリウムで防ぐ。

「フツ、中々どうして様になっているじゃないか?」

「言ったら、俺は接近戦は苦手であって出来ない訳じゃないってな!」

シグナムはレヴァンティンに力を込め、アディをネヴィリウムごと叩き切るつもりで押し始めるが、アディも負けじとその力を受け流す。

その際にシグナムはアディに尋ねるように呟く。実際、彼女はアディに剣の才を感じ取っていた。

それはシグナムのように一騎当千と言ったものではないが、十分一流と言えるものだった。

だがアディにはそれ以上の才があった。

それが射撃、弓による攻撃だった。

剣の才が一流なら、弓の才は超一流と言っても過言ではないもだった。

「そうか、ならこれならどうだ!!」

シグナムはアディから距離を取ると、レヴァンティンシユランゲフォルムを連結刃に切り替えカートリッジをロードする。

『Explosion.』

「ちい、まずいね……。ネヴィリウム!」

『装填』

シグナムが何かを仕掛けてくるのを感じ取ったアディはネヴィリウムに命じてカートリッジをロードさせ、その両手に握った短剣に炎と風を纏わせる。

「飛竜……」

「列空……」

そして、互いの息がぴったり重なった時……

「「一閃ッ！！」」

互いの最大級の技が爆発した……。

シグナムの放った獲物を狙う龍のように唸りながら迫る劫火と、アデイが放った炎と風を纏った斬撃がぶつかり合い、互いに反発し、周囲に爆音と爆風を撒き散らしながら消滅した。

「これも防ぐか……」

「俺としてはこれで防げて良かったけどね……」

「そろそろ終わりにしよう……。訓練の時間も過ぎていることだしな」

「賛成、それじゃ……」

シグナムの提案に同意を示したアデイはネヴィリウムを構え、いつでも駆けだせるように構えた。

対するシグナムもレヴァンティンを両手で持ち、必殺の一撃を放つために構える。

「ネヴィリウム……」

「レヴァンティン……！！」

『装填 / Explosion』

両者の声に反応し、それぞれのデバイスが空薬莖を排出する。そして、その排出された空薬莖が地に落ちると同時に二人は地を蹴った。

「紫電……」

「風牙……」

そして、互いが互いに己の剣の間合いに相手を捉えた時、手にした剣を振るった……

「「一せ……!?!」」

彼らの間に一筋の桃色の砲撃が割り込み、その一撃が互いに届くことはなかった。

「ちょ!?!危ないじゃないの、なのはちゃん!」

「なぜ邪魔をした、高町。折角の試合が大なしではないか」

アデイとシグナムは砲撃が放たれた方向を見ながら不満そうな表情を浮かべながら文句を告げた。

その文句の内容のベクトルは全く別の方向を向いていたが……。

「二人とも、少しは遠慮と言う事をしてくださいよ、いくら仮想空間でも周りをこんなにされたら止めるしかないじゃないですか」

文句を言う二人に対して空から降りてきた砲撃魔……もといなのはは少し怒ったような口調で言った。

「「……………」」

なのはの言葉を聞いた二人は目を一度合わせて自分達の周囲を見回した。

爆風で倒れた木々、凹凸ができた地面、そして一番目を引いたのは二人の間に出来た半径3mほどのクレーターだった。

「……………なのはちゃん、一発の砲撃魔法でこれだけの穴を開けるなんて……………」

「……………そうだぞ、高町」

「にゃ！？それは私がいくら叫んでも二人が反応しなかったからでしょ！？？」

「だから実力行使に出たと……………。いやはや、まさかエースオブエースが力で他人を抑え込む人だったとは……………」

アディは肩をすくめながらやれやれと言った表情で呟く。

「そう……………、そこまで言うなら、アディさんに特別メニューを出しちゃおうかな……………？新人たちの倍以上の内容で……………」

「すみマセンでしたッ！！」

アディの呟きを聞き逃さなかったなのはは目のハイライトを消しながらそう告げ、その言葉を聞いたアディは見事なジャンピング土下座を実行した。

アディール「サイガ……………、上官にとことん頭が上がらない男であっ

た。

side:アデイ

ああ、疲れた。

あの後結局なのはちゃんからシグナムと仲良く説教を喰らった後に、一日分の仕事 + をさせられたから肩が凝って痛いなのって……

「フウ……。でもま、あんなに真面目に模擬戦したのは久しぶりだったな……」

おっさんは今、最近のお気に入りの場所である機動六課隊舎の屋上にいる。

ここって風通しもいいから最高なんだよね。

おっと、イカンイカン、今日の模擬戦を抜かしたら真面目にやったのは2年前かな……。

『肯定』

「確か……、ローウェル君の相手をした時だったよね？」

『肯定』

うん、もう長い付き合いになるけど、ネヴィリウムの無口さはど
うにかならんのかね……。
ん？誰か来たみたいだね……。？

「やはりここにいたか……」

「おろ？どうしたの、シグナムがここに来るなんて」

後ろを振り返ると、今日の疲れの元凶もとい、シグナムが居た。

「いや、少しお前に尋ねたいことがあってな」

「ん？」

シグナムはおっさんの隣に経つと、手すりに手を乗せおっさんと
同じ方角を向きながら口を開いた。

「昼の試合の時、お前は風の変換資質と同時に炎も纏わせていたな
？あれはいつたいたいどういうことだ？」

「ああ、アレね。まあ隠す必要はないからいいけど、おっさんは風
と炎の二つ持ちなんだよ」

驚いてる驚いてる。まあ、実際二つ持ちなんて凄く珍しいからね、
風の変換資質持ち程じゃ無いけど……。

「変換資質を二つも持っているのか……。些か信じられんな」

「だろうね。だけど、おっさん以外にも二つ持ちはミッドに後二人
くらいはいるんじゃないかな？二つ持ちってのは風の変換資質持ち

よりも数は多いからな」

おっさんの言葉を聞いてシグナムは考え込むように顎に手を当てる。

「もう一ついいか？」

「なんだい？」

「お前は私を通して誰を見ている？」

「……………」

驚いたよ…………。まさか本人に見透かされるなんて…………

「どうした？」

「いや、何でもない。そうだね、俺は確かにお前を通して別の誰かを見ているのかもしれない…………」

「そうか…………。それが誰なのかは教えてはくれないのだろうか」

「…………今はまだね…………」

「分かった…………。私は戻るがお前はどつする？」

「もう少しここで風にあったっておくさ」

おっさんはシグナムの顔を見らずに答える。

今、彼女の顔を見ると、心の中をすべて吐き出してしまいそうだが

ら……。

「そうか、風を引かないようにな……」

「あいよ〜」

シグナムはそう言って屋上から去っていった。

おっさんはそれから一つの事をずっと考えていた。

(シグナムの胸ってマオのよりもでかかったな……)

第八話 模擬戦をする時には周りに気を使いましょう(後書き)

感想が来ない……。

書き方が悪いのかなあ……？

主人公設定（前書き）

遅くなりましたがアディの設定を……

主人公設定

・アデイル「サイガ

性別 男

年齢 35歳

目の色 茶色

髪の色 藍色

身長 179cm

体重 66kg

階級 一等陸士

魔道師ランク 陸戦AA、空戦B

魔力値 AA（リミッター付き）

魔力光 緑色

その他 炎熱変換、風の変換資質

詳細 自称おっさんの管理局員。以前は海の所属だったが、所属部隊が壊滅、解散になった際に地上に異動した。その時に、ティアナ「ランスター」の兄であるティード「ランスター」と何らかのかかわり

を持った。

戦闘に関しては弓による中遠距離からの射撃、経験によって培われた接近戦闘の動きや直感、危機回避能力を頼りに戦場を駆け巡ってきている。

特に、弓による射撃は『天武の才』を持っている。

普段は飄々とした掴みどころのない人物だが、真剣になることもある。

顔は上の下と言ったところだが、真剣な時の顔つきは普段の彼からは感じられないほどの凛々しさを感じる事がある。

その時を楽しみ、夢を持つことを信条としており、今現在の夢は平穩な老後を送ると言う普通な夢である。

上司に逆らえないのが基本デフォとなっている。

腕の割に階級が低い理由は上司をぶん殴ったせいで階級を落とされたと言っ事らしい。

使用デバイスは弓型デバイス『ネヴィリウム』

第九話 訓練とイベリコフタカツサンド（前書き）

遅れました。

今回はおっさんとティアナがメインです。

それではどうぞ！

第九話 訓練とイベリコフタカツサンド

side:アディ

「……………」

「大丈夫ですか、アディールさん？」

ハッ！イカンイカン。おっさんとした事が思わず現実逃避に走るところだった……。

みなさんこんにちは。

おっさんは今、訓練を終えた新人達と一緒に昼ごはんを食べに来たところだ。

来たところなんだけどね……

「え、何これ？スパゲッティの山なんて初めて見たよ……？」

そう、おっさんの目の前には山が存在している。山、マウンテン。

「いつものことです……。どうにも前衛型の二人はカロリー消費がハンパ無いそうで……」

「いや、にしてもこれは多すぎでしょ。食ったもんは何所に行ってるのさ？」

こつやってティアナのお嬢ちゃんと話している合間にもスバルちゃんとエリオ君は次々にスパゲッティを己の胃袋に詰め込んでいる。

「それよりも、訓練の方はどんな感じなんだい？」

「正直に言つて……基本的な訓練ばかりなのでハッキリと自覚できる程実力が付いているとは思えないんです……」

むう……。なるほどねえ……。

「でもま、基礎訓練は意味無いみたいに見えるけど結構大切なモンなんだよね。おっさんも局員になったところには教官に毎日ボロボロにされてたしね……」

「そうなんですか？」

む、なんだいその疑ってるような目は？

「そりやもう酷いもんよ？おっさんは三人でチーム組んでただけど、毎日毎日身体づくりから基本的な訓練ばかりやっててね。流石に我慢が出来なくなった時に教官に模擬戦を申し込んだんだ。おっさんたちが勝ったら訓練内容を見直してくれってね」

「それでどうなったんですか？」

「完敗。そりやもう見事なモンだったよ、おっさんなんて開始1分で撃墜されたからね？で残りの二人もそれから30秒かからずに撃墜されて終了。結局、訓練の内容は変わるどころか更に濃いものになってしまったのさ」

「ここでおっさんは一度コップに注いである水を飲み干す。
いやあ、あの時は若かったからねえ。」

「それが基礎訓練の大切さと何が関係あるんですか？」

「基本は繰り返しが大切ってこと。さっきの模擬戦の話だけど、おっさんたちは実は教官に挑んだのは二回目だったんだ。その時教官に言われたよ。『お前たちは基礎訓練を文句垂れながらもキツチリやってきた。だから俺に本気を出させることができた』ってね」

「……………?」

「用は繰り返ししてやることに意義があるってこと。継続は力なりって言うでしょ?」

「……………つまりやり続けることに意義があると……………?」

「簡単に言えばね。さてと、訓練に関する話はこれでおしまい。おっさんはもうお腹ぺこぺこだよ、精神的には目の前の光景でお腹いっぱいだけど……………」

ホント、この二人はよく食べるね。ティアナちゃんは訓練校のころからスバルちゃんのあの食欲を見てきて胸やけしなかったのかな?

「もう慣れました。そうしないと不本意なダイエットに成功してしまいそうでしたから」

「あ、そうなんだ……………。さてと、それじゃおっさんはこの『イベリコブタカツサンド』を頂くとしましょうか」

おっさんはティアナちゃんの何所か遠くを見ているであろう瞳を肴にしてカウンターから運んできたおっさんの特製サンドを手に取る。

「って！なんですかそのサンドイッチのような物は！？」

「何って、イベリコブタカツサンドだって。知らないの？」

「知りませんよ！？て言うかそんなメニュー食堂にありましたっけ！？」

ムウ、このイベリコブタカテ……（略）のおいしさが分からないと申すのか？

「ああ、それね。ちょっとおっさんが食堂のおばちゃんに頼んで材料をおっさんの分だけ仕入れてもらえるようにしたの」

さてさて、単価が高くて月に一度の楽しみとなっているイベ（略）を頂きますかね……って。

「あのさティアナちゃん？そんなふうにジツと見つめられてるとおっさん食べづらいんだけど……？」

「あ、すみません、どうぞお気になさらず……」

おっさんの言葉に反応するティアナちゃん。それじゃお言葉に甘えて……あー……

「ああ……」

た、食べづらい……！食べよじとすると隣からの視線が……！

「……一口食べるっ」

「いいんですか？」

「じゃないとおっさんが食べてもおいしく感じられないからね、一口だけだよ？」

「ありがとうございます！」

うん、ティアナちゃんもこんな風にしてればただの女の子なんだねえ。

「頂きます……ッ!？」

おお、あの顔はおいしって顔だな。おっさんも始めてそれ食べた時はそうだったもん。

「どうだい？」

「凄く美味しいです！でもこれって材料って何を使っているんですか？」

「地球って言う管理外世界の世界三大珍味って言われてる『トリュフ』、『フォアグラ』、『キャビア』って高級食材を使ってるんだ。ただでさえ高級な食材を使っている上に管理外世界だからミッドには数が多いは入ってこないから三割増しってところかな？」

「こんなおいしいものがあつたなんて……。アディールさん、これ私の分も仕入れてくれるでしょうか？」

おお、ティアナちゃんが新しい扉を開いた。

「多分大丈夫だと思うよ？けどいいの？これって物凄く高い割に量はちよつと大きいってくらいだけど？」

「大丈夫です。こんなおいしいものを食べたら忘れられませんよ！」

本当に大丈夫かなあ……。

「因みに値段は……」

「ええ！？そんなにするんですか！？」

イベ（略）サンドはかなり高いからその事をティアナちゃんに教えてあげたらティアナちゃん、あまりの高さに驚きまくっていた。

「君の今の給料で食べられる値段かな？」

「うう……でも……」

ううん、美少女が涙目になるとここまでのダメージをおっさんに与えてくるか……。仕方ない……。

「仕方ないね、おっさんが少し貸してあげるからさ。おばちゃんに頼んできなよ」

「いや、そこまでしてもらおう訳には……」

「子どもが遠慮するもんじゃないよ。大丈夫、代金は出世払いでいいからさ」

「あ、お金は取るんですね」

「もちろん、そうしないとおっさんが破産しちゃうからね」

「ありがとうございます！それじゃ行ってきますー！」

「うん、行ってらー」

うん、やっぱりあれぐらい元気な方がいいよね。

さてと、おっさんも早速イベリコ（略）を……

「なん、だと……」

バカな！？さっきまで確かに皿（三）の上にあっただはずー！

俺が目を離れたわずかな隙に誰かが食べていったと言っのか！？

「クソ！誰だ……！？」

その時、俺は犯人達の声聞いた……。

「さっきのサンドイッチおいしかったね、エリオ、キャロ？」

「はい！」

「なんかとっても高級そうな食べ物ばかり入ってましたし、とてもおいしかったです！！」

そして、俺は見た……。

そう……、犯人スバルちゃんの口元に……。俺の……おっさんの……イベリコブ
タカツサンドに使われているソースが付いていた事を……！！

「おっさんのイブ（略）サンドオー！！！」

その時、食堂にちょうど入ってきた部隊長は、おっさんの涙を見た。

第九話 訓練とイベリコブタカツサンド（後書き）

どうも、飛鳥です。

今話に出てきた『イベリコブタカツサンド』と言うのは、現在週刊少年ジャンプにて連載中のバスケット漫画『黒子のバスケ』にて一つ2800円と言うバカげた値段で売られていたものです。

因みにミッドで買つと日本円に換算して一つ4000〜5000円ぐらいにまで跳ね上がります。

アディは様々な伝手を利用してコストを最小限に抑えている訳です。

誤字指摘などはバンバンしてきてください。

お願いします。（感想もくれるとうれしいなあ……）

それではまた次回に！

第十話 訓練の意義（前書き）

お詫び

前回のイベリコブタカツサンドの価格を間違つて『2000円』と書いていましたが、本当は「2800円」でした！訂正しておきます！！！

第十話 訓練の意義

side:なのは

「はあ………」

あ、どうもみなさん。高町なのはです。
実は今、私は少し悩んでいます。

「どうしたん、なのはちゃん？溜息なんてついて

「そっだよ、なのは。何か悩み事でもあるの？」

「あ、た……はやてちゃんにフェイトちゃん………」

いつの間に近づいてきてたんだろう？
全く気が付かなかったよ。

「なのはちゃんが私の事をなんて言おうとしたのかは置いておいて、
ホンマにどうしたん？あんな溜息つかれたらこっちが集中できへん
からな」

「うん、実はね………」

（数時間前）

「うん、みんな今日もいい感じだね」

フォワードのみんなの訓練の様子を見ていた私は頷きながらそう呟いた。

今私は訓練場に映しだした破棄都市のビルの屋上でみんなの模擬戦の様子を見ている。

みんな初出動を終えてからかなり実力がアップしているからね。

今回の相手はリニアールの時に確認された？型が一機と今までと同じ？型が三機だけ。

「ああと、その手は不味いよスバルちゃん。あのデカ物相手には真正面からじゃないと効果は薄いんだから」

それと今回は私の隣でアデイさんも私と同じようにその様子を見ていた。

時折独り言でフォワードのみんなの行動を評価している。

これが結構的を得た評価をしているからこの人は凄いつて思わされる。

あ、最後の一機をティアナが墮としたみたいだね。

「はい、午前中の訓練はここまで！みんな、よく頑張ったね！」

私の一言で疲れ切っていたみんなの顔に笑顔が浮かんだ。

だからかな……、私は隣にいたアデイさんの真剣な表情を見逃していたんだ……。

「なのはちゃん、ちょっといいかな？」

「はい？なんですか？」

その後、訓練の後片付けをしていた私はアデイさんに呼びとめられた。

振り返ってみるといつも通りのアデイさんがいた、その手に缶コーヒ―を二つ持って。

「いやね、ちょっと訓練の事についてなんだけど……。あ、これ飲む？」

「あ、ありがとうございます」

アデイさんは微笑みながら私に近づいてその手に持った缶コーヒ―を差し出してきた。

私はそれを受け取り、その缶に書かれていた文字を見る。

『無糖』

これは何とも言えなかった。

まず私は基本苦いものは苦手だったから、だけど最近少し体重が気になりだした身としては嬉しい気配りだった。

「それで、訓練についてでしたよね？何か気になる事でも？」

「なのはちゃん、君の訓練の意義、おっさんは『いざって時に生き

残って帰ってこれるようにする』って考えているけど間違っていないよね？」

「あ、ハイ」

私は素直に驚いていた。

今まで誰一人として私の訓練に対する想いと言っか、そう言った事を言い抜かれたことは無かったから。

「それ、新人達には話した？」

「いえ……」

私がそう答えるとアデイさんは顎に手を当て考え込むように「うん」と唸りながら目を瞑った。

「それ、おっさんはかなり拙まどいと思うよ」

「え……？」

拙い？

アデイさんがなんの事を拙いと言ったのか私には分からない。

「だから、その訓練の意義の事さ。なのはちゃんはその意義を理解して教導をしている。だけど、教導を受ける側の人間は？」

「みんな分かっていると違いますよ？みんな賢いですから」

私がそう答えると、アデイさんは人差し指を左右に振りながら首を横に振る。

「それが拙いんだよ。どんな教育でも先生が教えるだけじゃ生徒は伸びない。生徒自身が、『これはなんの役に立つんだろっ』って言う事をしっかりと把握していないと教育の効果は半減する。これは魔道師の教導にも当てはまることだよ」

「何が言いたいんですか？」

この時、私は初めてアデイさんに悪意のある視線を飛ばした。理由なんて簡単だった。

今のアデイさんの言っている事は今までの私のやり方をすべて否定しているように聞こえたからだ。

そんな私の視線に気付いたのかどうかは分からないけど、アデイさんは視線を私から逸らし、遠くを見つめながら言葉をつづけた。

「つまり、一方通行な教導は考え物だよって話。先生が生徒の悩んでいる事を聞き出すのも教育の一つだよってこと。ま、おっさんの言う事を丸飲みにしなくても参考程度には覚えておいてちょうだいよ。おっさんは年長者らしく、若人わこどもの道しるべを示すだけだからさ」

そう言っアデイさんは飲み干した缶コーヒーを持ってその場を去っていった。

「一方通行の教導……。ねえ、レイジングハート。私、間違ってたのかな？」

『いいえ、貴方は間違っはけません。ですが、彼の言う事にも一理はあります。一応記憶には留めておいた方がいいかと』

「うん、この事はもう少し考えてから答えを出すよ」

『頑張ってください』

「……っていう事があったの」

「なるほどなあ……。確かに生徒の状況把握は先生の義務やからな」

今、私たちは部長室に来ている。

あのまま話すのにあの場所は少し人が多すぎたからだ。

「で、二人から見てフォワードのみんなはどんな様子なんや？」

「エリオとキャロは特に大丈夫かな？今あの二人は体力づくりが殆どだから」

「スターズの二人も似たようなものかな。ティアナが少し焦ってい

るみたいだけど、それも大丈夫だと思うよ」

「そうか、ならええんや。それじゃこの話はこれでいったんおしまい！次はお仕事の話や」

私とフェイトちゃんの報告を聞いたはやてちゃんは満足したように頷くと手をパンパンと叩き話を切り替えた。

それで今度の任務は何と地球への出張任務でした！

何でも聖王協会からの依頼だそうで、地球の海鳴市という町にあるロストロギアが落ちたと言う事です。

それが私たちが追っているロストロギア『レリック』の可能性も捨てきれないので、今回は私たち機動六課にお鉢が回ってきたということらしいです。

その話を聞いて久しぶりに故郷に仕事とはいえ帰る事が出来ると思った私たちは昔の話をしながら部隊長室から出て行きました。

s i d e : な の は o u t

だが、彼女は知らなかった。

彼女の把握ミスでなのはとティアナの間には大きな亀裂が走ってしまっ
まう事を……

第十話 訓練の意義（後書き）

おっさんの真面目モードな回でした。

おっさんもやる時にはやりますよ。

年長者は伊達じゃない！って所ですかね。

おっさんの言葉を聞いたのははこの後どうなっていくのでしょうか？

それは誰にも（作者を含め）分からない……

感想待ってます！

それでは次回またお会いしましょう……！

第十一話 出張任務 1

side:アデイ

「へ……？出張任務？」

「そや、だから準備しとつてな」

どうもみなさん。アデイです。

いきなりこんな感じではやてちゃんから出張任務の話が聞かされて危うく手にしたイベリコブタカツサンド（今月二回目）を危うく落としてそうになったよ。

ただでさえ最近出費が多いのにこの間イベ（略）サンドを食べそこなったせいでもっと財布が軽くなってしまった。

「出張任務って何所に？」

「第97管理外世界……、通称『地球』や」

ん？アレ、地球って確かはやてちゃん達を始めとした隊長陣三人が育った場所だったよね……？

確か十年ぐらい前に二度の大きな事件が狭い範囲で起こったことで結構有名になってたね。

地球には行ったことがないからなあ、仕事とはいえ楽しみだね。

「それで、いつ出発なの？」

「明日や。せやからちゃんと準備しとつてな」

「りょうかい。それじゃ、いったただつきまーす！」

おっさんははやてちゃんにそう答えると、手に持ったイベ（略）サンドを口に入れようとした。
その直後……

「あ！？」

「んふふー。隙有りやアディさん。中々美味しいやんか、高そうやけど」

はやてちゃんはおっさんが口に入れるまでの間の一瞬でイベ（略）サンドを一口食べていった。

イベ（略）サンドを食べた時のはやてちゃんの顔は年相応の笑顔を浮かべていて可愛かったとだけ言っておこう。
さて、おっさんもこの至高の一品を……

「な……に……！？」

まさか……あの一瞬で！？

いま、おっさんの手にあるものはイベ（略）サンドたる所以の具材を挟みこんでいたパンだけだった。

「おっさんのイベ（略）サンドオオー！！！」

機動六課設立後、早くも二度目となったおっさんの悲痛の叫びが食堂に木霊した。

魔法少女リリカルなのは 天駆ける蒼穹 第十一話『出張任務

side:アディ

はい、昨日は情けないところをお見せしてすいませんでした。アディです。

何と言うか、これって少しおかしいとおっさんは思うんだよね。

「ねえはやてちゃん？何で機動六課の主要メンバーが全員出張するの？」

そう、これが問題なのだ。

ここって仮にも管理局の機動課でしょ？その機動課が本来の任務に支障をきたしちゃうような人員配置っておかしくない？

「大丈夫や、108部隊や、聖王教会が私らがない間はサポートしてくれる手はずになっとるから」

いや、そう言う問題でもないと思うんだけど……。

まあ、いいや。ここってもう戦力だけでもあり得ないくらいの規模だし。

もうおっさんは何が出ても驚かないぞ！仮に後ろ盾がああ伝説の三提督だって言われても納得しちゃうもんね！！

「さてと、アディさんの一人漫才は置いておいて、みんなへりに乗り込んでな」

一人漫才って、はやてちゃんそりゃないでしょ……ってちょっと待ってよみんな！！

おっさんを置いてかないで!!

何とか飛び立とうとしていたヘリに乗り込んだおっさんは唯一の空席だったコパイロット席に座りこんだ。本当はこんなところに座っちゃだめなんだけどね、今回は仕方ない。

「はあ……」

「どうしたんすか、旦那？辛気臭い顔して？」

おっさんが溜息をついた時、隣でヘリの操縦をしていたパイロットのヴァイス君が横目でこちらを見ながら尋ねてきた。って、ちゃんと操縦に集中しなさいよ。

「いやね、管理外世界に行くのはいつでも緊張するもんだねって思ってたよ」

「へえ、旦那、海にも所属してたんすか？」

「昔ね、それこそ訓練校からのチーム組んでたやつらと一緒に引きぬかれてな。はっきり言っておの時のおっさんはそこまで実力は無かったから、他の二人についていったって言うのが正しいかな」

そうそう、あの時は大変だったな……。引きぬきに来た海の局員が『足手まといになる奴はいらん』とか言ってるマオがその局員をぶ

ん殴ったりして大変だった……。

「それで管理外世界にも？」

「ああ、行ったよ？魔法がある世界、無い世界。人間がいる世界、いない世界。科学技術が発展している世界、文明が崩壊して自然だけの世界なんてのもあったね。ただ、どの管理外世界に行くときも決まって少しは不安になるもんなんだよ」

「不安……すか？」

「そう、人間がいなければ自然保護区として管理すればいいけど、人間がいた場合、それも科学技術が発展して魔法がそこまで発展していない世界だと、管理局のポリシーとは相容れない可能性があったからね」

「やっぱり質量兵器っすか？」

「そう、管理局は質量兵器を禁止している。けどその世界では治安の維持に質量兵器を用いている場合が多いんだ。そんなところで管理局が質量兵器を規制し始めたらどうなると思う？」

おっさんの問いにヴァイス君は操縦しながら首を傾げる。

「そりゃ、治安が悪くなるんじゃないすかね？」

「その通り。実際、管理局が介入してから世界の治安が悪くなったっていう事例も少なくはないんだ。最悪、管理局とそう言った世界で争いが起こる可能性だってある訳だからね。ま、地球には魔法文化が無いらしいからそんな心配は杞憂なだけだね」

おっさんはそう言って笑いかける。

「旦那って人生楽しんでますよね〜」

「一度きりの人生だからね、自分が楽しまないと損でしょ。そうだね、何か土産でも買ってこれたら買ってくるけど?」

「いっすよ、気にしないでください」

ヴァイス君はそう言うと、ヘリの操縦に集中し始めた……ってもう転送ポートに着いてたのね。

確かにヘリは離着陸の時間が一番危ないからね。

頼むから落ちないでよ?

さて、そうこうしているうちにおっさんたちは地球に到着した。

周りをざっと見回しても何もおかしいところは見当たらない。

P T事件や闇の書事件と言った第一級ロストログアに関係した事件が立て続けに起こった世界にしては目立った様子はなかった。

と言うか、のどかでもとてもいい世界だ。

でも確か、今回おっさんたちが出張った理由もロストログアだから、この世界で三回目か。

案外物騒な世界なのかもしれないね。

おや? みんないつの間にかあっちに行っちゃって……。

なんだろう、なんか知らない金髪の女性がいる。

おっさんだけ仲間はずれは嫌なのでそちらの集団に近づぐことにした。

「ねえ、なのは？今近づいてきてるおじさんはだれ？」

「ム！？まさかおっさんの存在に気づくとは……。」

静かに且つ自然に話に入っていくと言うおっさんの計画が初期段階で潰されてしまった。

うん、おっさんは分かっちゃった。この娘、ティアナちゃんと同じ雰囲気を感じる……。」

そう、ツンデレの雰囲気だ！

「ああ、私たちと一緒に働いてるアディールさん。アディさん、こっちは私とフエイトちゃん、はやてちゃんの幼なじみの……。」

「アリサさんバニングスです。よろしく」

「これはご丁寧に、アディールさんサイガと申す者です。何卒よろしくお願いします、レディ」

おっさんはお辞儀をしながら左手を背中側に回し、右手を胸にあてた。

所謂紳士の礼と言ったところかな？

「こちらこそ、なのはこの人っていつもこんな礼儀正しいの？」

「ううん、いつもは飄々としてる人だね」

あら、なのはちゃんってばそんなふうにおっさんを評価してたのね。

まあ、事実だから何も言わないけど。

「やっぱりね、ねえ貴方？いつも通りでいいわよ？」

「あ、そう？いやねえ、なんかアリサ嬢の雰囲気からこの対応が適当かなって思ったんだけど？」

「それはどうも、でもここでは普通にしていいいわ。それに、雰囲気でも分かったのは私も同じだから」

「ま、短い間だろうけどよろしく」

「ええ、こちらこそ」

これが、おっさんとアリサ嬢の初対面であった。

「さてと、大体の地理も把握したし……後はどうするかねえ？」

あの後、隊長二人が任務の確認をし、スターズとライトニングで別れて観測用のサーチャーを設置することとなった。その中で、おっさんは何も言われてなかったので、なのはちゃんに尋ねてみたんだけど……。

『ねえ、なのはちゃん？なぜおっさんには何も役割が何もないのかな？』

『あ、アデイさんにはこの街の地理を把握してもらおうよつについてはやてちゃんが言っていましたよ？』

『地理の把握？そんな事でいいの？』

『はい』

とまあ、こんな風に今は海鳴市の街中を散策中でございます。と言うか、ホント機動六課、突っ込みどころが満載なんだけど……。よく地上本部の上の奴らに潰されなかつたね。レジアスのおっさん辺りは睨みきかせてると思っただけど……。

「さてと、余った時間はどうするかね……」

ま、それでおっさんも楽しめるからいいけど……。何所かで時間を潰せる場所は無いかなって……

「いいところになんかよさそうな場所発見！」

そんな場所を探していたおっさんの視線にある一軒の店が入ってきた。

何て読むのかな……『翠屋』ってこれここの世界の文字だからおっさんは読めねえわ。

まあいいや、雰囲気から喫茶店だろう。

「いらっしやいませー」

お、カウンターには結構なイケメソが、ここの店のマスターかな？
うん、ウェイトレスの娘さんも可愛いし、うんここの店は結構よさそうだ。

「おひとり様ですか？」

「あ、ハイ」

「ではこちらへどうぞ」

ウェイトレスの娘に連れられてカウンターの席へとおっさんは足を進めた。

「注文は？」

「ここのコーヒーでマスターが一番だと思う物を」

「畏まりました、ご旅行ですか？」

「まあ、似たようなものですかね。ちょっと仕事でこちら辺にね」

ここの店のマスターはカップを片手におっさんにそう尋ねてきた。

まあ、おっさんとしては詳しくは話せないからこんな感じにしか言えないんだけど。

「お待たせしました。最近手に入れた一番の豆を使ったものです」

「お、ありがとうございます」

マスターはおっさんの前にコーヒーの入ったカップを置く。

うん、この香りだけで分かる。この人は凄いね。

さてと、コーヒーが覚める前に頂きますッと……。

「っ……美味しい」

「ありがとうございます」

「今まで飲んできたもので一番ですよ。いい仕事してますね」

おっさんの言葉にマスターは笑みを浮かべながらカップを拭いていた。

その時、おっさんの後ろの方でドアが開く音がした。

「あれ？アディさん、どうしてここに？」

「やつほー、おっさんは散策に疲れたからここで一服してたんだよ」

「なのは、お前この人と知り合いだったのか？」

へ？へいマスター、どうしておっさんの上司の名前を知ってるんだい？

「あ、お父さん、紹介するね。私たちと一緒に働いてるアディールさん」

「へ！？お父さん！？」

「なのはの父の士郎です。よろしく。ところでアディールさん？家のなのはとはどういった関係なのか教えていただけなんでしょうか？」

「ちょ！？なんかマスター……士郎さんからとてつもないオーラが見えるんだけど！？」

「なのはちゃんはおっさんの上司ですよ。それ以上でもそれ以下でもありませんよ」

「そうか、ならよかつたんだ。俺のコーヒーを絶賛してくれた人へ手にはかけたくなかったからね」

「恐ッ！？何サラツと殺人まがいの発言してんのよ！？」

「ちょっとあなた、お客様にそれは無いんじゃない？」

「すまない、桃子。だけどこれだけははっきりとさせておきたかった……」

「あなた？」

「すみません、俺がわるかったですので許してください」

「なんか奥の方から出てきた女性が士郎さんに話し掛けたら士郎さんを包んでいたオーラが一気に霧散した。」

「夫が失礼しました。なのはの母の桃子です」

「アディール」サイガと言います。と言うか、お二人ともお若いんですね……」

そう、目の前にいる二人。高町夫妻はすつごく若々しい。

二十代って言っても通じるのではないのでは？っていうくらいだ。

単純計算でもおっさんよりも歳は上のはずなただけどね……。

その後、スターズの三人となのはちゃんのご家族と一緒にフェイトちゃんが迎えに来るまで色々話していた。と言うか、お姉さんの美由紀ちゃんも若々しすぎるでしょ……。

本日の発見……なのはちゃんのご家族は若々しかった。

第十一話 出張任務 1 (後書き)

はい、と言う訳で今年最後の投稿は出張任務でした。
いや、改めて見返すと酷いな……。

士郎さんと桃子さんのキャラが相変わらず酷い……。

感想、ご指摘待ってます。

それでは良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4406y/>

魔法少女リリカルなのは Strikers 天駆ける蒼穹

2011年12月30日00時48分発行